

---

# ガラスの靴を回収し隊

雪月花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ガラスの靴を回収し隊

### 【NZコード】

N1827N

### 【作者名】

雪月花

### 【あらすじ】

【ガラスの靴を脱ぎ捨てて】の番外編集。

本編【ガラスの靴を脱ぎ捨てて】は、異世界に落ちた女の子がそこで出会ったゴールデントレーラーとともに頑張る、シリアル系バイオレンスアクション恋愛ファンタジーです。

こちらは「メディアタッチのお話ですが、本編に登場する、クールなユリジエス殿下のイメージを大切になさりたい方はご注意くださいませ。



## 1 ピンクとグリーンの会話 小川のほとりにて（前書き）

本編ではまだあまり活躍の機会がないコリジエス様の尊話。

本編【ガラスの靴を投げ捨てて】の【プロローグ - コリジエス side -】に関するお話です。

マーリイに出会つ前のコリジエス様です。

# 1 ピンクとグリーンの会話 小川のほとりにて

「ななな、相棒。おまえ絶対に短髪にしない方がいいぞ。ピンクの髪が肌に馴染みすぎてハゲに見えるから！ んでさ、コリジエス様つて殿下方の中で一番もてるよな。なんであんなに無愛想なのにもてるんだよ！ やつぱりあの銀髪のせい？」

「僕の髪のことはほつとこてよな！ 気にしてるんだから。ユリジエス様？ いやあ、あの無愛想さが、もてる秘訣なんじゃないの？」

「だつてさ、俺達の女神、エリザベス嬢まで喰われたつてんだぜ！ しかも次の日の朝、偶然会つたときには、何事もなかつたかのように流されたつてオカシムリだつたとよ！ それでも忘れられないつて、あの方しかいないので、三日三晩泣いてたつて、女神様がだぜ！ そんなの普通ありえねーよな！」（息切れ）

「あ、あのさあ、そんな話、どこから聞いてきたの、君？」

「決まつてんだろ。エリザベス嬢の侍女、ルチルちゃんからだよ（照） すつづー可愛いの。他にも聞いたぜ。コリジエス様の好物は脚のきれいな女だと、ベッドシーツはシルクよりもダブルガーゼ派だとか」

「ね、ね、ちょっと君……あんまりそんなこと言いふらしてると、不敬罪で捕まつちゃうよ」

「大丈夫だ！ ここは誰もいない小川のほとり。それに、こんなこと言えるのはおまえだけだからな。なにより、俺はコリジエス様が大好きなんだ！ かつこよさは俺といい勝負だし、女の好みもそつ

くりだし、いつかコリジエス様のようにクールな男になれるよう、  
こつやつて研究してんだよ。期待してろよな」

別にわたしは、脚で女を選んでるわけではないのだがな。まあ、誰  
だつていいんだ。

冷たいシルクよりダブルガーゼが好きなのは事実だが、……  
それより、グリーン頭、わたしの研究なんて楽しくないぞ。頼むか  
らほつといてくれ。

## 2 ピンクの独白　野獣地にて（前書き）

本編【ガラスの靴を脱ぎ捨てて】？第十四話　ゴリジョスの側近たち  
に関連したお話です。

なんだつて僕たちは、朝っぱらからじきに走り回れてるのでしょうか。

「化け物ではない人間が、まだ生存している可能性がある。直ちに救助せよ！！」

コリジエス様、直々に下された命令で、僕たちは夜通し村中を捜索せられるし

朝田が登った今度は、昭田よりもさらには範囲を広げて、木材を探索するように命じられた！

(あの小三のほとりよつも、もつともつと向ひうだよ)

昨夜から今日にかけて、僕らはユリジエス様に殺されるんじゃない  
かと思つたんだ。

始まりは昨日の夕方のこと。

僕たちは、火から逃れた狂人を捜して小川の周りを捜索していた。結局何も見つけられず、コリジエス様の噂話に花を咲かせながらシリバ村に帰つたとき、村に到着されたばかりのユリジエス様が、なぜか、青筋立てて怒り狂つっていたのだ。

まさか、相棒とユリジエス様の噂話をしてたのがバレたの！？ なんて、戦々恐々としたけど、どうやらそうではなく、指示書に深刻な誤りがあつたらしい。

「村中を焼き払え」という指示書はユリジエス様の書いたものではなかつたというのだ。

稚拙な作りの指示書を書いたのが誰だったのか、僕たち下つ端にはわからぬけれど、それを不審に思わず、確認もとらず、素直に村を焼いた僕たち部下に対して、コリジエス殿下の怒りが炸裂したのだ。

ユリジエス様の怒り……それが、【夜通し続いた村の捜索】と【夜明けから始まつた雑木林の捜索】の”理由”というわけ。

……夕方になつて、ヨレヨレのボロボロになつた僕と相棒が、ようやく野営地に戻つてくると、初めて見かける少年が歩いていた。痩せこけているけれど、でもどこか可愛らしい少年だと思つ。そしてなんと、その少年は、ユリジエス様の天幕に入つていくではありませんか！

衝撃的現場を生で目撃したそのとき、隣をチラツと窺うと……呆気にとられ、その場に立ちすくむ相棒の顔つたら、もつ……

「やややー、誰なんだ、あの坊やは。なんでいきなり殿下の天幕へ？まさか、ユリジエス様の恋人とか言つちゃつたりしちやつたりしてー？ やつぱりあの説は事実だったのかー？」

その夜、疲れているはずの相棒が、ユリジエス様の男色疑惑について、ひとり盛り上がつていたのは、言つまでもない。

ひとりと言つておぐが、わたしには少年を愛でる趣味はない。  
あまりにも、わたしが女性を寄せ付けないからだろうか、以前もそ  
んな噂が流れたことがある。

わたしが美姫と浮き名を流すようになったのは、その男色疑惑の流  
布がきっかけだった。

ああ、そういうえば、こう問われたこともあったな。

「殿下を慕つて押しかけ騎士となつた、グリーンの髪の少年とは、  
今も親密にされているのですか？」と。

迷惑な話だ。

### 3 グリーンは見た！（殿下と子犬） 村と野営地の狭間にて（前書き）

本編 第十話 邂逅 - グリジェス side -  
に関連したお話……つていうか、部下の視点から見ると、同じ出来事でも、全然違う解釈となつております。

ユリジエス様、『愁傷様』です。

### 3 グリーンは見た！（殿下と子犬）

村と野営地の狭間にて

「ああ、君、まだ村の搜索は終わってないというのに、いったいどこへ行つてたの？」

「あ、あ、あのはなー、今な、俺、すげーもん見ちまつたかもしけねえんだよつ！つ、つまりな、そのな」

「ね、ねえ、ねえ、ちょっと君、大丈夫なの？ まだ夜は始まつたばかり。僕たちつてば、朝まで村の搜索しなきゃいけないんだよ。瓦礫をひっくり返してでも生存者を捜さなきゃいけないんだよ。わかつてる？」

「ああ、うんうん、そのことなんだけどな！ ユリジエス様は村の人間と、できたら金色の成犬を捜すように言つてただろ？」

「うん、そう仰せだつたね」

「でな。俺、見つけちゃたんだよ、その金色の犬を」

「えええつー？ 本当かい？」

「うーん、だけどな。その犬、子犬みたいにちつちやいんだよ」

「んー、じゃあ違う犬だったのかもねえ」

「そこ」でだ！ 俺、その犬の後をつけたつて訳だ

「犬の後を？ ついて行つたの？」

「そうそう。 そんな、 そいつ、 村の片隅から何か変なものを拾つてきてんだよ」

「それって何だったの？」

「それが、 も……」

「どうしたの。 君らしくない」

「いや、 それが。 透明でよく見えなかつたんだよなー」

「…………ふーん」

「おお、 それよりも、 だ！ ユリジエス様が村の外に偶然いてさ、 その犬としゃべつてたみたいなんだよな」

「はあ？」

「ユリジエス様さ、 あの子犬に突然飛びついたり、 見つめ合つて話してたかと思つたら、 ふたりして右に左に首を捻りあつてたんだよ！ その後、 子犬に逃げられて、 ガックリうなだれてたし……」

「…………」

「ユリジエス様つてさ、 ただ者じやないとは思つてたけど、 実は、 犬と交流できるんじやね？」

「…………」

「おい、コト、相棒、俺の言つ」と信じてねえだろ」

「……あのね、君。あのクールでめったに笑顔も見せないコリジェス様が、自分から子犬に飛びついてじゃれあつたり、見つめ合つて首をかしげたり、拳げ句の果てに、子犬に振られて落ち込むだなんて、誰が信じるつていうのさ」

「…………だよなー。実は、俺も、自分で自分を信じられないんだよ」

「はあ。もー、いいから。わざと検索を続けよ。ね

おい、グリーン、あの場面でおまえはいつたい何を見ていたんだ？おまえの頭は飾りもんなのか？切り落として振つたら、さぞかしい音がするのだろうよ。

#### 4 エリザベス嬢の独白 夢の後（前書き）

本編 プロローグ - コリジエス side - (コリジエス視点)

番外編集 ピンクとグリーンの会話 小川のほとりにて (

部下視点)

番外編集 本作品（エリザベス嬢視点）

全て同じ夜の出来事についてのお話ですが、それぞれ違う視点から  
読むことができます。

どんな順番で読んでも大丈夫です。

#### 4 ハリザベス嬢の独白 夢の後

愛しています。ゴリジエス殿下……

冷たい紫紺の瞳に、少しだけ薄いけれど柔らかそうな唇。纖細な顎のラインに、しつかりした首筋。ともすれば、女性的とも言われそうなお顔とは裏腹に、全身バネのようなお身体はたくましくて……

ほら、すれ違う瞬間を想像するだけで、わたくしの胸が高鳴つてしまふわ。徐々に近づいていくと、こんなに彼の胸板が厚く、力強いのがわかる。わたくしの田の高さにある、がつしりした肩にすがりつきたい。

朝議に向かうお姿は、朝日を浴びて眩しいほど輝き、流れる銀の髪を指で触れたくなるの。

悔しいけれど、女性はみんな、あなたに釘付け。

その見目麗しいお姿も、優雅な立ち居振る舞いも、全てに田を奪われる見事なお方。

ああ、昨夜のユリジエス殿下は本当に素敵だった。

激しく求められて、切なく醉わされて……

はあ  
……

あんなの初めてだった。

高貴なお方なのだからと近寄ることもできなかつたけれど、来る者は拒まず、という噂は本当だつたのね。いいえ！ もしかしたら、わたくしだからこそ、あんなに情熱的に抱いてくださつたのかもしれない！

ふうう、……今夜も夢を見せてくださいないかしら。艶めいた視線も、力強い腕も、纖細な動きをする指先も、あの方の全てはわたくしのもの。

ほら、こっちを見て。わたくしはここにいるわ。この熱い想いを視線に込めて送るから。どうぞ、受け止めてくださいな。

ねえ、わたくしの殿下。

ちよ、ちよつとルチル、何よその用はー。  
いいのよー。殿下にすぐされても、絶対に諦めないわ。わたく  
し。

ええ、わかつてゐわ、今すぐお父様にお会こしてから出でるので  
しょう?

あーー。もうよ、やうだわー!

今夜あの方をお迎えするために、新しいナイトドレスを用意しよう  
かしら。  
そうと決まつたら、チャツチャと行くわよ。ルチル、わたくしにび  
つたりのものをお選びなさい。

はー。

また、つまらない者を抱いてしまった……

#### 4 ハリザベス嬢の独白 夢の後（後書き）

これにて、編集作業は終了です。以前のものと内容は変わってません。

これから本編も手直ししていくつもりです。パソコンが使えないため携帯で作業していますが、たまに割り込み編集がうまくいかず、チャグチャになるので、プロローグ部分から順番に編集、隨時アップしていく、その後で編集前の話を削除していくつもりです。

それから、こちらの番外編集は、編集とともにタイトルも「メディ風に変更しました。

「迷惑をおかけしますが、今後とも宜しくお願ひいたします。

## 5 ピンクの幸せな夜（前書き）

本編？第十七話 真実の中に、少しの嘘

「自分だけ、なぜできない」と、ひとり悩んだユリジエス様。

## 5 ピンクの幸せな夜

・ 今夜も良い天気。2つの月がキレイだな。

暑い日中と違つて、涼しい風の通り抜ける夜は、ひとりで散歩をするのに最高だ。明るい月明かりが、昼間のようにくっきりとした影をつくる。これは、2つの月が出てる間にしか体験できない。

そびえ立つ山の輪郭が、僕の足を止める。夜空に浮かび上がるその光景は圧巻で、しばし見とれていた。

ここは野営地。そして僕はその外れに立つてゐる。すぐ横には、しーんと静まり返つたいくつもの天幕。これらの中へ、たくさんの騎士や兵士が眠つてゐるなんて、信じられない。

彼らは、昨夜と今日と、行方不明者の搜索や事件の捜査で疲れきつて、きっと今頃、泥のよつて寝つてゐることだろう。

僕もそつ。すこし疲れてる。だけど、体はヘトヘトなのに夜の野営地をこうして歩いているのは、異常に興奮した相棒がひとついるすべて眠れないからだ。

頭の上で両手を組み、んー、と伸びをした。

・・はあ、気持ち良い夜。

それにしても、さつき見た少年は、いつたい何者なんだろう。相棒の言つよつな、ユリジエス様の恋人だなんて、とても思えないけど……

・・あ、あれ？ ユリジエス様？

見つかならないように、僕は素早く身を隠した。相棒と行動をともにしていると、鈍くさい僕でも気配を消すくらいお手のものとなるのだ。

ユリジエス様は、ひとり、大きな岩に腰掛けていた。長い脚を少し曲げ、体の後ろで岩に両手をついて、わずかに上を向いた横顔が、少しだけ憂いに満ちていた。

ユリジエス様が向いているのは、シルバ村の跡地。

……あれほど必死なユリジエス様を見たのは久しぶりだった。シルバ村は、きっとの方にとつて特別な場所なのだろう。

ユリジエス様が、身を起こした。月明かりに銀の髪が輝いて、なんて……見事な。

このようなユリジエス様を独り占めできたのだから、相棒に感謝しなければならない。

「うつとりと見とれていた僕は、ユリジエス様の口元に、微かな動きを見つけた。……なにか、つぶやいている？ それとも祈りを捧げているのだろうか。

静かに時間が流れる。

こうして僕は、強くて美しい奇跡の申し子、ユリジエス様との幸せな夜を、天幕の影に隠れてひとり噛み締めていたのだった。

マリイ　マリイ　マリイ　……、どうも違うな。

　　マリ、ヒ　マリ、ヒ　マリ、ヒ……

　わたしが名を呼ぶと、あれは微妙な顔をするのだ。名前をしゃんと呼んで、早く喜ばせてやりたいのに、なぜ上手くいかないのだろう。

　夜も更けたが、よし、もう少しだけ練習しよう。

## 6 グリーンの自業自得な夜（前書き）

本編？第一二十三話 王都エメレム  
に、ちょっとだけ関連のあるお話です。

## 6 グリーンの自業自得な夜

俺の相棒には、妹がいる。のんびり屋の奴と、血が繋がっているのが何かの間違いじゃないかと思つほどどの、チャキチャキした女の子だ。

奴より少しだけ紫がかつたピンクの髪は、毎晩の念入りなブラッシングのおかげでいつも艶やか健康的だ。サッパリした気性のくせに、綺麗に結い上げたその髪と、意外に色っぽいうなじが彼女を女らしく見せている。

二十一歳の俺たちよりも、四歳も年下とは思えないほどしつかりしているのが、奴の妹、レイチエルだつた。あれで十七歳だなんて、冗談だろ？ 絶対に詐欺だぜ！

そんな彼女が、今、王都エメレムで就職活動をしているらしい。

相棒とその妹の実家は、王都エメレムから馬で十日ほどの距離にある、カーシュを領地とする田舎貴族だ。

別に生活に困っている訳ではないが、「どこのドラ息子と結婚させられるよりも、王都で好きな男を見つけて伴侶としたい！」と宣言し、さつさと実家を出てきたという話だつた。

そして近いうちに、女神、エリザベス嬢の屋敷へ面接に来ることなつて。さすがにそこまでは、妹ラブの相棒でさえも知らない話だつた。

なんで俺が、妹の予定まで知っているかといつと、それはもちろん、脚の綺麗なルチルちゃんからの情報だ！

先日の不可解な惨事が起きた前、俺たちの部隊はシルバ村にほど近い演習場で、特別訓練を受けていた。そのときに受け取った彼女からの手紙に書いてあつたんだ。「あなたの相棒の妹さんが侍女の面接を受けに来るのよ。気位の高いエリザベス様に気に入っていただけるが、ちょっと心配なの」って。

壊滅した村の後片付けが終わり、今朝シルバの野営地を出発した俺たち一行は、明日中には王都エメレムに到着する。

着いたらすぐに会いに行ひー

久々にルチルちゃんと過ごすんだから、夜明けまであんなことやこんなことをして、絶対に彼女を眠らせないつもりだ。ムフフ。

そうと決まつたら、俺も早めに寝なくちゃな。疲れて使ひもんにならなかつたら洒落になんねーし。

……つて、ビわああああああつーー！

なんだよ、なんだよ！ いつたい何が起こってるんだ？

なんだつてユリジエス様とその側近の方々が無言で戦つてんだよ

つ。

あつさり倒したはいいけど、そここの新人坊やはなんで田を覚まさないんだ？

うえええっ、たまたま近くで覗いていた俺まで事情聴取されるのか？ まさかそんな。

いやマジで、俺、こいつらとは無関係なんですけど。明日の甘い夜のために、今夜は鋭氣を養ははずだつたんですけどおーーー……

なんだ、グリーン頭か。こんな荷物置き場で何をしていた？  
……まあ、よい。分かっているだろうが、今夜のことば、他言無用だ。

それから、さらなる襲撃に備えるため、今夜はおまえに、荷物置き場の警備をしてもらおう。

これも分かっているだろうが、わたしの小姓を起こすなよ。よいな？



## 7 レイチールの受難（前編）（前書き）

本編 第二十六話 異世界の暮らし方  
の一ヶ月前のお話です。

今回から、ゴリジエス様のボヤキがなくなりました（苦笑）

## 7 レイチールの受難（前編）

残暑も厳しいある日のこと。重い荷物を抱えたわたくしは、日差しを避けるように木陰のベンチに座り込んでいました。

そこは『一の郭』の縁豊かな中央公園。目の前の噴水からは、細かい飛沫が吹き上がり小さな虹を作っています。なのに、わたくしの心にはそれを楽しむ余裕もありませんでした。と、いうのも……。

「はあ……」

わたくしには、忍耐というものが足りないのでしょうか？ 働き始めて一ヶ月。早くも堪忍袋の緒が切れたわたくしは、今朝、用意していた辞表を叩きつけて、エリザベス様のお屋敷から飛び出してきたのでした。

政略結婚を避けるため、旅芸人に同行をお願いしてエメレムまでやつてきたというのに……。本当にもう、ため息しか出できません。こうしていても仕方がない、とりあえず街へ下りようか……と、重い腰を上げたときでした、酔っ払い男に絡まれたのは……。

男は、ベンチから立ち上がったわたくしの手首を掴んでいます。近くにはいません。噴水の向こう側に談笑する一人の淑女が見えるだけで、彼女たちがわたくしを助けてくれるとは思えませんでした。

どうしたら良いのでしょうか。身なりだけは立派なこの男は、わたくしがどのように抵抗しても、手を振りほどくことができないのです。それどころか、「一発やらせるよ」と腰に手を回し、わたくしを引き寄せようとしてくるではありませんか。

安全なはずの『一の郭』内で、なぜこのような目に遭うのでしょ

う。泣きたくなつたそのとおり、

「昼間から酒に溺れて何をしている。レディを放しなさい」

硬質な声にハツと顔を上げると、そこに立っていたのは、そびえ立つ山のようにがつしりした体躯の騎士でした。

濃い茶色の髪は驚くほど短く、燃えるような赤い瞳が男を威嚇しています。それでもニヤニヤした男がわたくしを放さずにいると、短髪の騎士様は、もう一度静かに警告しました。

「聞こえなかつたか？ 彼女を放せと言つてゐる」

次の瞬間、騎士様が動きました。わたくしの体を抱き寄せる反対側の腕に、続いて首の後ろに、鋭い手刀を叩き込んだのです。いつの間にか、男は剣を握っていたのでした。

運命のお方。ああ、やつとめぐり逢えた……と、胸ふるわせるわたくし。

そこへ、小姓姿の少年が声をかけてきました。

「間に合つて良かつた。怪我はないですか？」

「は、はー。助けてくださいありがとうございました」

わたくしよりもずっと幼い印象の少年は、金色の毛並みが美しい犬を連れていました。彼は地面にノビている男をつついて、騎士様を見上げます。

「お疲れ様でした、マイオスさん。といふで、この人どうします？」「走る馬車から飛び降りたときは驚いたよ、マリイ。もう一度どちらでくれ、こんな無茶は」

「あはは、『じめんなさい』でも、この子が困つてたからさ」

「…………」

「悪かつたつてば、マイオスさん。『じめんな』でさ、これ、どうじょうか?」

「…………公園の外に放り出しつづく。そのつづけ警備兵が見つけてくれるだろ?」

その後の自己紹介で、お二人がヨリジエス王子殿下の直属の部下ということがわかりました。

なんという偶然なのでしょう。わたくしは、ヨリジエス様の執事であるアルバート様に、昔からずいぶんとお世話になつてきているのです。今回、家出したときもそうです。エメレムに着いて一番最初に相談に乗つていただいたのが、アルバート様でした。結局、仲の良いルチルの働くお屋敷に採用されたのですけれど、今度こそは、アルバート様が懇意にされているお方のお屋敷へ面接に行くつもりでいます。

明るい希望と全財産を詰めたバッグを胸に抱き、意氣揚々と市街地へ向かつたわたくし。その夜は、宿屋の一階で美味しい夕食をいただくと、マイオス様の夢を見ながら幸せな眠りについたのでした。

その翌日から、わたくしの身の回りに次々と異変が起きるようになるのですが、まさか、あの日出逢つた小姓のマリイ様が全ての原因だったとは、このときのわたくしには、想像もつかないのでした。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1827n/>

---

ガラスの靴を回収し隊

2010年10月9日23時44分発行